

書論における〈心〉字術語研究

—漢から唐を中心に—

西原 歩

【目次】

序論

本論

第一章 書論における〈心〉字術語

第一節 〈心〉字術語について

第二節 〈心〉から成る術語について

小結

第二章 〈心〉字術語の用例と考察

第一節 典故と対句による考察

第二節 〈心手〉合一論

小結

第三章 漢から唐における〈心〉字術語

第一節 漢魏晋南北朝から唐へ—書論の変化

第二節 術語からみえる書論の継承

小結

結論

主要参考文献 附表

序論

書は、その人の心を表すという考え方は古くから存在し、書だけでなく画や文学においても内面性は重視されてきた。揚雄の「書心画也」は有名である。

ここにおける「書」は、著述や文書を指しており、書法を指しているのでは

ない。しかし、書論は文論や画論の影響を受け、発展してきたものである。書論は、当然ながら書と人の関係に言及した言葉が多い。張懷瓘は「文字論」で「書則一字已見其心。（書は則ち一字にして已に其の心を見はす。）」と言っている。書論の中で〈心〉は、名詞として用いられることもあるが、審美術語の中で、根源的な意味を成しており、主体の精神として核を成す術語である。「心」は本来、心臓の形を象り、心臓、こころ、知識、意思、感情などの意味を指す。しかし、〈心〉は身体器官の心臓の意だけでなく、人の精神活動までを指すようになった。それは、書論の中でどのように存在し、他の審美術語と関連を持つのかを本論文で明らかにする。

第一章 書論における〈心〉字術語

〈心〉字術語において、先行研究に倣うとすれば、創作主体（作者）の審美心胸と芸術境地のレベルの高さは、鑑賞から実作においてすべての過程において体得されている。それは具体的に言うならば、視覚における鑑賞—感受する〈心〉と、習得過程での精神の修養の〈心〉、またそれらに至るまで蓄積されてきた自己の精神を書に託し、映し出すといった発露としての〈心〉の三つに分けられると考える。検出した二語から成る術語の十一例は、以下の三つに分類できる。書の境地を指すもの—〈心契〉〈童心〉〈心悟〉。心に関連のある名詞—〈心胸〉〈心醉〉〈心力〉〈心服〉〈聖心〉〈道心〉。心と同義で同じ主体の精神を指すもの—〈心意〉〈心靈〉。「心の境地を指すもの」として分類した〈心契〉は、『中国美学範疇辞典』の〈心〉の範疇と共通しており、この中で最も注目すべき術語であるといえる。主体と客体が合一するというこの概念は、書において理想であり、唐代までに基本的な思想・考え方として定着していたと考えることができる。

第二章 〈心〉字術語の用例と考察

漢から唐の書論において〈心〉一語の用例は一五五例であり、そのうち漢魏晋南北朝の書論は二七例、唐は一二八例である。〈心〉の対語には、〈手〉と〈目〉が最も多い。総数は、〈心〉と〈目〉(眼)一七例、〈心〉と〈手〉二五例、〈心〉と〈筆〉五例である。〈心〉と〈目〉の対において〈目〉のほとんどが身体の一部としての「目」と、書における鑑賞眼や見極める能力のある「見る目」の二つである。書は、〈心〉が中心ではあるが、もとより古典や文字を見る力を養わなければならない。人格や精神といった内面的なものは、目(鑑賞眼)と手(技術)によって支えられているのであり、一つとして欠くことができない。〈心〉と〈手〉において代表的に述べられるのは、「書の境地に関するもの」と「執筆に関するもの」である。「書の境地に関するもの」は、心と手が合一するということである。それは、『莊子』輪扁の「得之於手。字必於心。口不能言。」のように、言葉では言い表せないもので、自ら得て感ずるものである。また、『莊子』の「得而忘言」のように、概念的的理解を超えたところにある境地であり、心をもって筆を忘れ、手をもって書を忘れるのである。「執筆に関するもの」は、心は深く通曉することに励むべきであり、技法は修練を積み重ねなければならないと説く。

第三章 漢から唐における〈心〉字術語

唐以前の書論においては、自然物になぞらえて造形の特徴を描写するものが多い。それは、衛恒の『四体書勢』、蔡邕の『九勢』、衛夫人の『筆陣圖』などにみえる。これらは一つの論じ方として定着していた。また、他には品第という方法で書人を品評する方法もある。袁昂の『古今書評』や庾肩吾『書品』がそうである。自然物の比況という方法は、唐代にも受け継がれるが、主流ではなくなっていく。唐代は、規則的な楷書美を重んじ、楷法の極則と言われるま

でに隆盛を極めた。それらの背景には熊秉明氏が述べるような、当時の書法家の創作態度や思想があったに違いない。それは、「意在筆前」や「心正气和、則契於妙。心神不正、書則敝斜。」といった概念である。また、唐太宗の『筆法訣』が虞世南の『筆髓論』の語句と完全に一致するように、虞世南の書論が他の書論に及ぼした影響は大きく、同時代の李世民から張懷瓘までに及んで、唐代の書の理念を代表するひとつになっているといえよう。

結論

〈心〉字術語は、創作主体(作者)の視覚における鑑賞—感受する〈心〉と、習得過程での精神の修養の〈心〉、またそれらに至るまで蓄積されてきた自己の精神を書に託し、映し出すといった発露としての〈心〉の三つに分けられる。二語から成る十一例の術語の中では、特に、書の境地を指す〈心契〉が最も重要である。なぜなら、『中国美学範疇辞典』の〈心〉の範疇としても見え、〈心契〉は、主客合一の概念として唐代までに基本的な思想・考え方として定着していたと考えることができるからである。

〈心〉と〈目〉の関係においては考察の結果、名詞として用いられるものが多く、そのほかは、鑑賞眼を指す意味であった。〈心〉と〈手〉において代表的に述べられるのは、「書の境地に関するもの」と「執筆に関するもの」であった。以上の研究によって、〈心〉の概念は、審美術語における主体の精神であるという成復旺氏の考察に行き着く。また、書論の術語を検討することで成復旺氏の論を補強するに至った。〈心〉の概念は心の働きの状態によって変化するものであり、客体と合することで審美を成すものである。

【作品研究 創作】「停雲詩」

《釈文》

停雲 思親友也 樽湛新醪 園列初榮 願言不從 嘆息弥襟 鶴鶴停雲 濛濛時雨 八表
同昏 平路伊阻 春醪独撫 良朋悠邈 搔首延佇 停雲鶴鶴 時雨濛濛 八表同昏 平陸
成江 有酒有酒 間飲東窓 願言懷人 舟車靡從 東園之樹 枝条載榮 競用新好 以招
余情 人亦有言 日月于征 安得促席 說彼平生 翩翩飛鳥 息我庭柯 斂翮間止 好声
相和 豈無他人 念子実多 願言不獲 抱恨如何

《法量》

二二四・〇×五三・一センチ 三幅

《解説》

陶淵明の「停雲詩」を小篆体で制作した。「停雲詩」は、「序」「停雲」「時運」「榮木」の四篇から成る四言詩であり、その中のひとつである。「停雲」は、空の動かぬ雨雲を見つめながら、酒を飲み交わし語り合う友人を得られない優悶をくり返し歌ったものである。書風は、王福庵や楊沂孫を意識した。偏旁の高さの変化や、極端な太細の変化、線の揺れなどを避け、標準的な篆書を書くことを心掛けた。朱で野線を引き、黒と白の紙面に朱が入ることで作品が明るくなるよう工夫をした。また、全体的に統一感を重視し、同じ文字が複数あるが、旁は同じ形を用いるようにした。

【作品研究 臨書】「書譜」

《釈文》

書譜卷上 吳郡孫過庭撰 夫自古之善書者 漢魏有鍾張之絶 晋宋称二王之妙 王羲之云 頃尋諸名書 鍾張信為絶倫 其余不足觀 可謂鍾張云没、而羲献繼之 又云、吾書此之鍾張、鍾当抗行 或謂過之 張草猶当鴈行 然張精熟、池水尽墨 彼令寡人耽之若此、未必謝之 此乃推張邁鍾之意也 考其專擅、雖未果於前規、撫以兼通 故無慙於即事 評者云、彼之四賢、古今特絶 而今不逮古、古質而今妍 夫質以代興、妍因俗易（後略）

《法量》

一三五・〇×三五・〇センチ 一帖 二四折

《解説》

修士論文の研究対象である「書譜」の原寸臨書を制作した。「書譜」は、草書の基本として学ばれる古典であるが、それだけでなく、内容は書の理法を説くもので、読んで然るべき書論である。臨書するにあたり、文字の余白と用筆の抑揚に留意した。文字の中の余白が広く、文字自体は小振りであるが、余白によって実寸より大きく見える効果を大切にしたい。また、用筆においては、節筆が特徴的である。節筆の表現は紙の折り目によるものであるが、平らな紙面に表現するには用筆の開閉に難があった。また、太細の変化が顕著であり、筆の抑揚に配慮した。臨書は、形だけを追うのではなく、線質や墨量等に気を配り、また内容を理解することが重要である。

【創作】 停雲詩

不	聲	生	有	條	觀	昏	獨	阻	露	榮	倚
獲	相	翮	音	執	音	乎	昔	靜	倚	顯	雲
食	呌	飛	日	繁	懷	陸	延	肉	雲	音	泉
恨	豈	鳥	夕	麗	入	床	休	東	濛	不	親
如	無	息	于	用	身	江	條	軒	晴	從	尋
何	俾	然	征	新	車	有	雲	昔	雨	蘇	也
	入	庭	庖	如	靡	酒	露	酌	八	息	橫
	命	柯	得	已	從	有	晴	獨	喪	徧	湜
	子	斜	促	哲	東	酒	雨	爨	同	益	新
	真	翮	席	余	園	間	濛	良	昏		嚮
	多	問	設	情	業	詭	八	翮	乎		團
	顯	也	循	入	樹	東	喪	雙	踏		前
	音	如	乎	夾	精	窗	同	纒	伊		効

平成丙申孟夏錄陶淵明停雲詩於福不亭步于

【臨書】 書譜

此乃所習字之通法也
 乃好學子之粗傳書法
 信古之通法也
 實仁之用之通法也
 分信者生加以好更之時

畫形可取文回互
 相涉故之仿通二
 知也括着京海
 我携不意男即
 為之鐘聲音
 雲也乃為精一

乃其為要
 其先子之道
 其通之通
 其通之通
 其通之通

伯英之為
 其通之通
 其通之通
 其通之通
 其通之通